

## 全米オープン決勝観戦記

大坂なおみが3回戦で敗退した今年的全米オープンテニス。女子決勝は誰も予想しなかった対戦になった。シングルスランキング150位のラドゥカヌ18歳と73位のフェルナンデス19歳の対決である。優勝したラドゥカヌは予選3戦を勝ち抜き本戦入りし、決勝戦を含めてセットを失うことなく頂点を極めた。予選勝ち上がりで、失セットゼロは全米オープンがプロ化して初めての出来事である。

### 勝負を分けた疲れ

ラドゥカヌは予選から数えて10戦戦ったが、すべてストレート勝ちで、試合時間が少なかった。その分、疲れが溜まっていない。しかも、ラドゥカヌが入った山（ドロー）でランキング1位のバーティが敗れたために、トップテン選手と戦うことなく、決勝までたどり着くという幸運に恵まれた。

これにたいして、本戦から入ったフェルナンデスだが、3回戦の対大阪戦を含めた4戦のうち3戦はトップテン選手（大坂、スウィトリーナ、サバレンカ）、もう1戦は17位の実力者ケルバーとの対戦で、すべての試合が第3セットまでもつれた。フェルナンデスはダブルスも3回戦まで戦っており、疲労が溜まっていないはずはなかった。

ともにストロークミスが少ない試合を勝ち進んできたが、テニスの質から見ると、体が小さいフェルナンデスの方が上手である。フットワークが良く、相手のコースを読んでコマネズミのようにコートを走ることができる。しかも、ストロークの体幹がしっかりしていて、フォームが崩れない。体の大きい選手のようなパワーはないが、相手の力を巧みに利用して左右に打ち分けるストロークはそれなりの強度を持っている。サーブもスピードはないが、コントロールが効いている。大坂なおみがもっとも苦手とするタイプである。

ラドゥカヌもストロークミスが少なく、それが勝ち上がってきた最大の要因だが、これといった武器があるわけではない。テニスの質から見るとフェルナンデス有利、疲れから見るとラドゥカヌ有利と見るのが、事前の評価だっただろう。非常に競った見応えのある試合だったが、勝負ポイントでのミスを重ねたフェルナンデスが敗北した。目に見えない疲れが、ショットの精確性を欠いた。これが勝負の分かれ目になった。

トップテンをなぎ倒してきたフェルナンデス自身、ランキング150位の選手に負けるはずがないと算段していたと思う。試合結果に納得はしても、悔いが残る敗戦だった。次にグランドスラム大会決勝にたどり着けるのが何時になるか分からないからだ。

2014年の男子決勝、錦織対チリッチ戦を思い出した。錦織は勢いで決勝までたどり着いたが、長く厳しい試合をくぐり抜けた疲労が溜まっていた。これにたいして、体力のあるチリッチは好調を維持し、体力的な余裕をもって決勝に臨んだ。対戦成績では錦織有利だったが、体がついていけず、錦織はストレートで負けてしまった。それでも、当時、錦織は「も

う勝てない相手はいない」と言い放ったが、錦織にはこれが最後のグランドスラム大会決勝となった。それほどまでに、グランドスラム大会の決勝へ進むのが難しいし、タイトルを獲得するのが難しい。千載一遇の機会をものにできるかどうか、一生に一度のチャンスだったのである。それを考えると、23歳で4度のタイトルを取った大坂の凄さが分かる。

ラドゥカヌもフェルナンデスも、まだ若いとは言え、次にグランドスラム大会の決勝に進めるのがいつかは分からない。もしかしたら、もうないかもしれない。ともにパワーに欠けるから、体が大きいパワーがある選手との対戦には苦勞するはずである。どこまでパワーを付けることができるか。それが今後の躍進の課題になるだろう。

### ビッグスリー時代の終焉

何時の時代にも、どのようなスポーツでも、世代交代は起きる。2021年全米オープンももしかして、ビッグスリーがタイトルを競った最後の大会になるかもしれない。すでにフェデラーは引退に近い状態だし、ナダル故障が多く、今後再び、パワフルな若い選手と競っていきける保証は何もない。

この二人に比べ、ジョコヴィッチの2021年は自らのテニス生涯で、もっとも輝かしい年になるはずだった。全豪、全仏、ウィンブルドンを制覇し、残すは東京五輪と全米だけになった。今年の活躍を見れば、ゴールデンズラム（4大大会すべてに優勝し、五輪金メダル取得）達成が確実と見られてきた。しかし、周知のように、東京五輪では準決勝でズヴェレフに敗れ、ゴールデンズラム達成の夢が消え去った。しかし、まだ全米を制覇すれば、52年振りに男子の年間スラム（同じ年に4大大会優勝）の偉業を達成し、かつフェデラーとナダルを抜いて、4大大会21回目の優勝を成し遂げるところまで来た。史上最強のテニス選手として、歴史に語りつがれる偉業を達成するはずだった。

しかし、今年の全米オープンのジョコヴィッチの調子は今ひとつだった。3回戦の錦織戦から決勝まで、すべての試合で第1セットを落とし、コートに立つ時間が長かった。錦織戦が3時間半、4回戦のブルックスビー戦が3時間、5回戦のベレティーニ戦が3時間半、準決勝のズヴェレフ戦が3時間半である。サイボーグと称されるジョコヴィッチだが、もう34歳である。真夏のゲームでこれだけコートに立つ疲労は並大抵のものではない。

これにたいして、ジョコヴィッチより9歳若いメドヴェージェフはほとんどの試合を2時間以内で終わらせており、余裕をもって決勝に臨むことができた。この二人の肉体的な疲労度の違いは大きかった。

ジョコヴィッチやナダルを撃破できるのは強烈なサーブで主導権を取ることができる場合である。彼らと対等にストローク合戦を展開でき、かつサーブで圧倒できれば、勝機が開ける。今のテニス界でそれができるのは、メドヴェージェフ、ズヴェレフ、ツイツイパスである。皆、身長もパワーも、ビッグスリーを圧倒する力をもっている。違いは経験値だけである。

今大会でジョコヴィッチが不運だったのは、ナダルが欠場したために、準決勝と決勝の2

試合で、二人の若手リーダーと対戦しなければならなかったことだ。若手との世代交代の戦いに一人で立ち向かうという不運が重なった。強敵ズヴェレフを撃破した後に、さらに強力なメドヴェージェフを相手にする余力が残されていなかった。

今年の全豪決勝で、ジョコヴィッチはメドヴェージェフの挑戦を一蹴した。この試合、メドヴェージェフのサーブに威力がなかった。サーブで主導権が取れないと、ジョコヴィッチであれナダルであれ、勝ちきるのが難しい。そのリヴェンジとなったのが、今年の全米オープン決勝である。

第1セットの攻防は、この試合全体を特徴づけるものだった。メドヴェージェフのサーブが冴え渡り、15本のファーストサーブすべてをポイントにした。メドヴェージェフがサーブミスエースを連発したのにたいし、ジョコヴィッチのファーストサーブの確立が低く、ダブルフォールトも連発した。サーブだけでなく、ストローク戦でもジョコヴィッチにミスが多かった。やはり疲れていたのかもしれないし、早くゲームを終わらせることを考えて、焦ったのかもしれない。打点が低くなったファーストサーブが入らなかったばかりか、メドヴェージェフの粘りに根負けしていた。こうなると、体力のあるメドヴェージェフのペースである。

ジョコヴィッチの疲れを考えると、第2セットは絶対に取りなければならないセットだった。これを失って、フルセットの4時間試合なれば、勝ち目がないからである。しかし、その第2セットも、最初にサーブミスブレイクされたのは、ジョコヴィッチだった。メドヴェージェフは強烈なサーブで相手にブレイクを許さず、第2セットも勝ち取った。

こういう展開になると、ジョコヴィッチの戦意が落ち削られる。気持ちが切れたのだろうか、第3セットは2つのサーブミスゲームをブレイクされ、ゲームカウント5-2で、メドヴェージェフのサーブミスゲームを迎えた。この時になって初めて、メドヴェージェフのサーブミスが乱れた。乱れたというより、会場がジョコヴィッチへの声援一色になり、メドヴェージェフのサーブを混乱させるような歓声が止まなかった。観客にしてみれば、2時間も経たないのに簡単にジョコヴィッチが負けてしまっただけでは面白くない。だから、ジョコヴィッチを応援して、もう1セット見たいというヤジに近い声援である。

メドヴェージェフがこの試合、初めてサーブミスをブレイクされて5-3となり、さらにジョコヴィッチがサーブミスキープして5-4となったところで、会場は大興奮状態になった。ジョコヴィッチの奮起を促す声援に、ベンチに戻ったジョコヴィッチが感動で涙するという希少な光景が映し出された。これまで、サイボーグのように勝ってしまうジョコヴィッチは、フェデラーやナダルに比べて、人気は今ひとつだった。なぜビッグスリーの中で、自分だけが疎まれるのか。そのことに不満を持っていた。ところが、会場全体がジョコヴィッチを応援する声援に変わったのだ。

しかし、ジョコヴィッチの奮闘はここで終わった。第3セットをひっくり返す余力は残っていなかった。メドヴェージェフが、ズヴェレフやツイツイパスに先んじて、グラッドスラム大会を制した。メドヴェージェフが頭角を現した時、フェデラーはストロークフォーム

が美しくなく、大成しないと考えていたという。その後、評価を改めたのは言うまでもないが、今でも見た目は美しくない。しかし、ストロークは粘り強いしパワーがあり、簡単にミスしない。そこに強烈なサーブである。ズヴェレフのような精神的なブレが少ない。少し前までは痲痺持ちで、コートマナーが悪いと評価されていたメドヴェージェフだが、もともと非常に頭の良い選手で知性に富んでいる。フランス語でも英語でもインタビューに応えることができる。この優勝でメドヴェージェフ若手世代のリーダーになった。20年近いビッグスリーの時代が終わり、新しい時代が始まりつつある。